

人と人
つながりの物語

コープデリグループの組合員数は約540万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。



illustration: Maiko Dake

茨城県内で暮らす30代半ばの夏美さんがコープの宅配を利用し始めたのは、1年と少し前。長男の琉成くんが誕生し3人家族になったばかりで、近くで暮らす母からすすめられたことがきっかけだった。

「息子が生まれたばかりの頃は動き回らないからスーパーで買いたい物もできましたが、今は息子が元気づいて、スーパーへ行くのも大変なんです。最近特に宅配は便利だなーって感じています」

夏美さんの実家は農家で、米や野菜を育て近所のスーパーに出荷している。夏美さんは「両親が育てたお米は特別おいしい」と話す。実は、夏美さんが幼稚園へ通っていた頃から、母はコープの宅配を利用していた。

「物心ついたときからコープさんが来ていました。最初はグループ配達で、担当の方が来ると母たちがブルーシートを広げてそこに商品を置いて、カルタのように誰が何を注文したか読み上げてピックアップして、分けていくんです。それが楽しかった」と笑う。たこ焼きやアイス、おやつに出てくるものもコープの商品だった。

「母はいつも農作業で忙しそうで、私はあまり構ってもらえなかった。だから私は息子とできる限り一緒にいてあげたい。母は『農家の嫁』としての務めも

多くて、だからコープさんにはとても助けられたみたい。冷凍のお刺身、イカフライやコロツケなどの冷凍食品は、子どものときから食卓に上っていたから、おいしいってわかっていてるものがあります」

以前は栄養士として仕事をしていた夏美さんだが、今は無理のない範囲で実家の農業を手伝っている。

.....\$.....

「自分で家庭を持って宅配を利用し始めた最初の配達るとき、来てくださった常陸太田センターの小澤さんという女性の職員さんが『以前お母様のご自宅にも配達をしていたんですよ』って私を見て言ったんです。母の名前も知っています。よく覚えてるな、すごいなって思ったんです。後から母に聞いたら、母もちゃんと小澤さんを知っていた」

そんな付き合い方をするんだと夏美さんは驚いた。

「昨年のお盆休みに、夫・息子・私の3人でコロナにかかってしまったことがあって。3人とも発熱して、特に息子は息もできないくらいしんどそうで、夜も眠れなくて。やっと寝たーってときに小澤さんが配達にやって来たんです。そのとき『すみま

せーん、やっと寝たから外に置いておいてもらえますか？』って小声で伝えました。あとから外を見たら黄色いカードに『体調に気をつけて、お大事にしてください』って書いてあって。あ、さっき話した後書いてくれたんだな、ありがたくなって思っ読んでみました」

あたたかい気持ちになるやりとりがコープの宅配にはある。夏美さんはそう言う。

「兄の奥さんも宅配を利用して、会ったとき『さばの味噌煮がおいしいよ』とか、『この冷凍食品もおすすめ！』とかすごく話が盛り上がるんですよ。コミュニケーションのきっかけになっています。私が今とても気に入っているのは『CO・OP』ひとくちこうや豆腐。だしもついでに便利なんですよ」と笑った。

「ただ家族みんなが健康で、ふつうに暮らしていくことが願い、そう話す夏美さんはとても幸せそうだ。

ただ平穏な毎日が続く。毎日の小さな出来事が、大きな幸せを形作っているのだ。

過去の物語も
こちらから読めます



あなたのエピソードを
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。